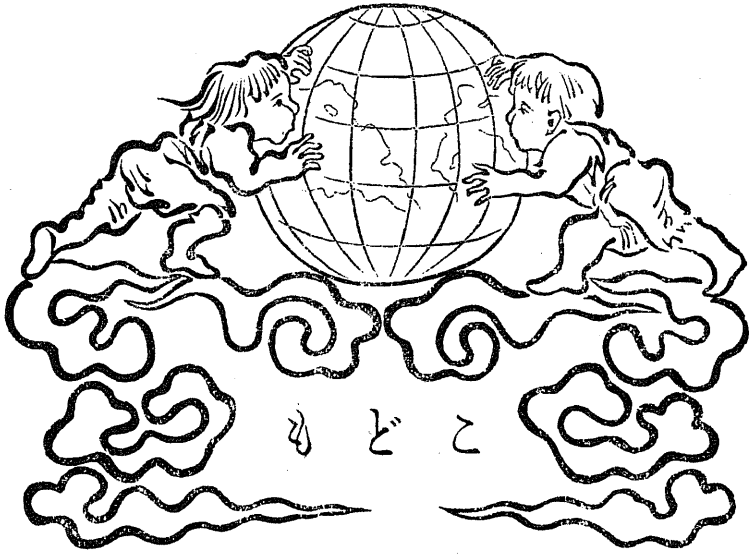


も ぎ 子 と 人 婦

第 二 卷 第 十 一 號



お 姫 様 の 行 方

や ま と の 翁

むかし、まづある處  
に一人の王様が  
ありました  
とさ。王様の事  
ですから、  
お庭なども大變  
に廣くって  
いろくいな草  
や木などが、  
澤山にうわ  
って居ました。  
夫に王様  
わ又大の植木  
好で  
して、毎日  
くいろくの  
木を手入  
させました  
中に、

一本の林檎の木がありました、これを王様が大變お大事になさ  
 二  
 いまして、常々、こんな事を仰いました。

『此林檎の實を、一つでも取ったものわ、誰でも、すぐ、深い  
 地の底え落ちこんで仕舞うのだ』

所が、この王様に、三人のお姫様がございまして、毎日朝か  
 ら晩まで、この廣いお庭で遊んで居ました。

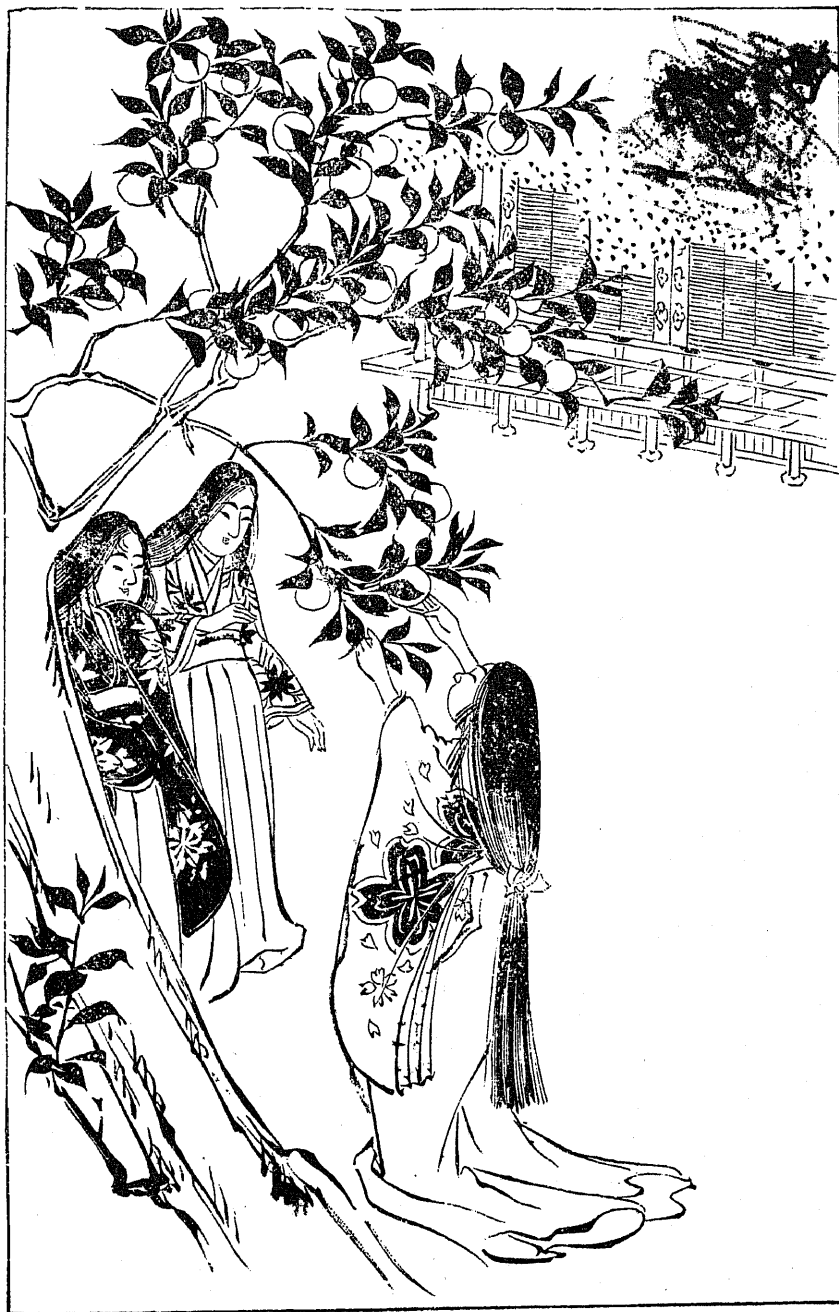
さて 秋になって 林檎の實が どれもこれも眞赤に熟して  
 さも甘し相に 枝一面に生って居ましたが、三人のお姫様たち  
 わ、ひよいとこの木の下えやって参りまして、口口に

『あら、ちよいと、甘し相だわね、あんなに眞紅のだもの、  
 風でも吹いて、落っことして呉れ、ばいーに』

といー合あって、下したから眺ながめて居ゐますけれども、風かぜも吹ふいて来きなければ、大方や枝えだが、地面ぢめんに付つき相さになつて居ゐても、さっぱり一つも落おちて来きませんので、一番いちばん年とし下したのお姫ひめ様が、姉あね様さま方かたに申ましますには、

『お父とっあんんの仰おつしやるのわ、屹きつと度ど、餘よ所その人ひとのことだろーと  
思おもうのよ、お父とっあんんわ、平ふた常んから、ここんなに私わたし達たちを可か愛あいがつ  
て下くださるのだもの、林りん檜ぎ一つ取とつたかららつて、私わたし達たちを地ぢ面めんの底そこ  
え、落おして仕し舞まうなんて事ことわななかろーと思おもうのよ』

こーいーながら、お手てを伸のばして、一いち番ばん大おきな紅あかい甘あまし相さな  
のを一ひとつ、ちよいとちぎつつて、夫おとこを二ふた人りの姉あねさんの前まえ出だした  
もんですから、そこて姉あねさんの方かたも尤あつともだと思おもつて、とーく



三人して夫を分けて食べにかゝりました所が、さう大變、夫を一口頬ぼるか、頬ぼらないか知れない中に、三人とも、深い深い地面の底え落つてちてしまいました。

さ　　だん／＼晝の御飯時になって、王様が御飯をお上りになろーとするに、お姫様が三人ともお見えなさらない。今に來るだろーと思つて待つても／＼お見えにならぬ。そこで、家來共にいゝつけて、家の隅から庭の隅々まで探させたが、さっぱり影も姿も見えない。それから大騒ぎになって、夜晝かゝって大勢で手分して探して見たが、何處へ行つたのか分らないので、皆見附け様がなくって、歸つて參りました。

王様わ甚く御心配になつて、なんでも惡者か何か、何處か

えつれて行つて隠したのに違ちがひないといつて丸まるで、氣違きちがひの様ようになつて探さがさせたのですが、と一と一見けんつかからぬから、そこで國中くにちゆうえお布告ふこくを出だして、誰たれでもお姫様ひめさまを探さがし出した者ものにわ、大たい變へんな御褒美ごほうびをやろ一とゆ一事ことにしました。

國中くにちゆうの人ひとも、この事ことを聞きいて、王様おうさまに忠義ちゆうぎになる事ことだし御褒美ごほうびも頂いたげるしとゆ一ので、皆夫々みなそれぞれ海山うみやまを越こえて、方々はたはたえ探さがしに出でかけましたが、さて其中そのなかに、三人兄弟さんにんきょうだい連づれて探さがしに出でた者ものが、つた。この三人兄弟さんにんきょうだいが、尋ねたづねくして八日目位やつかめくらになつた時とき、ひよいと立派りっぱな家いへえ行き當あたりました。

やれ疲勞つかひたと言いつて、この家うちえ這入はいつた所ところが、中々なかなか奇麗きれな家うちで、お座敷ざしきの眞中まんなかには、ちゃんとお膳立ぜんだてをして、今煮立いまにたてた許ばか

りの御馳走が山盛りになつて居ます。所が不思議な事にわ、これ程な家に人っこ一人見えなければ、話し聲もしない。丸で森として居る。其うち誰か出てくるだろーと思つて待つて居ましたけれども、夕方近くなつても、誰も見えない。もー三人とも待ちくたびれる、お腹わ空いてくる、御馳走わやっぱり、賚え立ての様に、ポッポッと湯氣だつて居る。で、堪え切れなくなつたから、そこに座つて各自好きなものを取つて食べて仕舞つたのです。

そこでお腹も、もー大丈夫に出来たもんですから、誰か一人こゝに残つて居て、あとの二人で又、お姫様を探しにゆこーとゆーので、三人て懺をひいた所が、一番上の兄さんが、残り番

に當つた。

で、翌日になつて二人が出て行くし、上の兄さん一人で留主番をして居ると、晝頃になつて、どこからとなく、ほんとは小さな小人が一人、ひょいと出て参りまして、兩手に澤山な御馳走を持って来て、兄さんには是を上様として、其一片を下に落つことしておいて、夫を兄さんに拾いなさいといへますから、何氣なくうつむいて拾ひにかゝつた所が、其小人わ、不意に飛びかゝつて来て、頭の髪をつかんで、頭を散々になぐつて置いて又どこえか消えて行きました。

次の日になつて、二番目の兄さんが、残り番になつて居ますと、又小人が出て来て、昨日と同じ目に遇いました。



三日目になつて、一番の弟が残り番になりました。所が又小  
 人が出て来て、御馳走を落つこととして、拾えといへましたので  
 この弟が

『何んだ、自分で落つことしたものを、自分で拾えば、いーじ  
 ゃないか』

といつて、吐りつけました所が、小人が大變に怒り出して、  
 つかみかゝつて來たから、弟も負けて居ないで、いきなり、小  
 人を指の尖てつまんで、あっちこっちえ、振りまわしました。  
 すると小人わ、大に弱つて

『やー、もー免してくれ、免してくれ、其代り、お姫様の居る  
 所を知らしてやる』

(つゞく)